

大学生の同調行動と文化的自己観および大学適応感との関連

五十嵐 透 子*・野 村 珠 紀**・岩 崎 眞 和***

(平成25年 9 月30日受付；平成25年11月 5 日受理)

要 旨

近年、親密な友人関係の構築や社会生活の円滑化において重要な役割を果たしている同調行動を、他者の考えや態度を内心から受け入れる“内面的同調”と不本意ながらも表面的には同調する“表面的同調”とに区別して理解する必要性が指摘されている。そこで、本研究では大学生を対象とする質問紙調査によって友人関係における同調行動の2側面と文化的自己観および大学適応感との関連を検証した。大学生360名（男性151名、女性209名）を分析対象とした結果、同調行動傾向は相互独立的自己観とは負の、相互協調的自己観とは正の関連を示した。また、同調行動傾向が高くて自分の行動への変容願望が低い人は、変容願望が高い人に比べて相互独立的自己観と大学適応感が高いことが示された。今後の課題として、本研究で作成した大学生用の同調行動尺度の信頼性と妥当性の更なる検証の必要性について論じた。

KEY WORDS

同調行動 conformity behavior, 友人関係 relationships with friends, 文化的自己観 cultural views of self
大学適応感 subjective university adjustment, 大学生 college students

1 問題と目的

社会的な行動様式の1つとしてこれまで社会心理学領域を中心に研究が蓄積されてきた“同調行動”⁽¹⁻⁴⁾は、集団内での葛藤を回避して内的緊張を低減したり、集団への適応を促進するポジティブな効果⁽⁵⁻⁷⁾と、反対に自らの意見と異なる集団の意見に同調した結果体験する内的葛藤がストレスになるというネガティブな効果の双方が報告されている⁽⁸⁾。特に思春期から青年期における同調行動とそれが過度な状態と考えられる“過剰適応”⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾は、学校適応感や精神的健康に大きな影響を与えていることが報告されており⁽¹¹⁾⁽¹²⁾、藤原⁽¹⁾は他者の意見や態度、行動に同意して応じる“内面的同調”と、自らの考えや価値観などに反して同調している“表面的同調”の2つに区分している。葛西・松本⁽¹³⁾は高校生においてこれら2つの同調行動と特性不安、公的自己意識、承認欲求の3要因との関連を検証し、同調行動傾向が高い生徒の他者評価への敏感さと不安の高さを明らかにしている。また松本・葛西⁽¹⁴⁾は、大学院生への半構造化面接によるインタビュー調査を通じて、高校時代に比べて大学入学後は同調行動が減少する傾向を明らかにした。これは互いの類似性や一体感を重視したチャム・グループを形成する思春期から、大学生へと移行するにつれて同調だけではなく相互の違いを認めたり尊重するピア・グループを形成しながら親密性を高めていくことによる変化⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾と考えられる。高校生の同調行動や青年期における同調行動の発達の変化に関する研究が僅かではあるが報告されるようになったのに比べ、大学生の同調行動とその関連要因に焦点を当てた実証研究はほとんど報告されていない。互いに傷つけ合わないよう気を遣う自己防衛的で表面的な友人関係を構築する傾向が指摘されている現代の大学生⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾においては、友人関係の維持のために自分の意見や価値観などの自己表出を抑制する表面的同調行動をとることが考えられる。したがって、彼らの精神的健康や大学生活への適応状態、また円滑な友人関係の構築のための臨床心理学的援助を行う上で、彼らの同調行動に関する研究は有益な知見をもたらすと思われる。

これらを踏まえ、本研究では大学生の友人関係における2つの同調行動と、彼らの心理的要因との関連を検証することとした。同調行動に関する内面的同調と表面的同調の2側面で対象を区分するために、葛西・松本⁽¹³⁾が作成した高校生用の同調行動尺度を、大学生の“友人関係における同調行動傾向”と自身の行動に対する違和感とそれらの行動に対する“変容願望”を併せて測定できるように改変して用いた。

大学生の同調行動との関連が推測される心理的要因の1つに、社会文化的影響を受けて形成される“文化的自己観”⁽¹⁹⁾を選択した。文化的自己観とは、文化の中で形成された自己に関する認識を表す概念であり、“相互独立的自己観”と“相互協調的自己観”の大きく2つに区分される。前者が優勢な西欧文化圏においては自他の境界が明確で

個性や自己表現が重視されるのに対して、後者が優勢な東アジア文化圏では自他の境界が曖昧あるいは可変的で、他者との結びつきや調和的な相互関係が重視されやすく、日本では相対的に後者の相互協調的自己観が優勢とされている⁽¹⁹⁻²¹⁾。したがって、日本人が対人関係を維持したり何らかの集団に適応する際には、自分の意思や感情体験を表出するのではなく、他者あるいは所属集団への同調行動をとることで対人関係や社会生活をより円滑にして、自己の安定さを求める傾向が強いことが考えられる。しかし、異なる文化の人々との交流経験が表面的同調行動傾向の低下をもたらすことが推測されるため、本研究では文化的自己観に加えて海外における一週間以上の生活経験の有無も併せて検討することとした。

さらに、本研究では友人関係における2つの同調行動と大学生の精神的健康や大学生活での主観的体験との関連についての理解を深める目的で、大学適応感⁽²²⁾に着目した。大学適応感は、“個人－環境の適合性”の視点から大学生活全般に対して抱く主観的な感情体験や適応状態を表す概念であり、本研究では大学適応感の多角的測定に適した“大学生用適応感尺度”⁽²³⁾を用いて同調行動との関連を検討した。

以上の点を踏まえた本研究の仮説1－3を以下に示す。

仮説1：同調行動傾向は相互独立的自己観とは負の、相互協調的自己観とは正の関連をそれぞれ示す。

仮説2：異文化体験を有する大学生は、異文化体験の無い大学生に比べて相互独立的自己観が高く、同調行動傾向は低い。

仮説3：同調行動傾向が高い対象のうち、自らがとっている行動への変容願望が高い群（表面的同調を行いやすい群）は、変容願望が低い群（内面的同調を行いやすい群）に比べて大学適応感が低い。

2 方法

2.1 調査時期と分析対象

2012年10月中旬から11月中旬にかけて、甲信越地方にある単科の国立大学法人1校で講義終了後の集合調査形式と個別配布個別回収形式による質問紙調査を実施し、学部1－4年生394名から回答を得た。そのうち回答に不備のみられた34名を除く360名（有効回答率91.37%：男性151名、女性209名）を分析対象とした。分析対象の平均年齢は19.86歳（ $SD=1.42$ 歳、 $range: 18-24$ 歳）であった。

2.2 調査材料

質問紙は、回答者の基本的属性を問う項目を記載したフェイスシートと、以下に示す3種類の尺度から構成した。

(1) フェイスシート 性別と年齢、および観光旅行や一週間未満の滞在を除く海外での生活経験の有無（以下、“異文化体験の有無”と略記する）を2件法で訊ねた。

(2) 友人関係における同調行動 葛西・松本⁽¹³⁾が開発した“同調行動尺度”を参考に、友人関係における同調行動傾向と自身の行動に対する変容願望の2側面を測定するための尺度を作成した。葛西・松本の尺度は、内面的同調を表す“仲間への同調”（13項目： $\alpha=.85$ ）と、表面的同調を表す“自己犠牲・追従”（11項目： $\alpha=.83$ ）の2因子（計24項目）から構成されており、両因子で十分な信頼性が得られている。しかし、本尺度は高校生を対象に開発されていたため、大学生を対象とする際の内容的妥当性の観点から、葛西・松本の報告で因子負荷量が低値な項目や大学生には適さないと思われる計5項目の除外と、大学生の同調行動傾向の測定により適した項目表現への修正を行った。最終的に計19項目（2因子）を採用し、全項目に対して以下の①→②の順で回答を求めた。

①：普段その行動をとる程度について、「1：ほとんどあてはまらない」から「4：とてもあてはまる」の4件法で訊ねた。高得点であるほど友人関係において同調行動をとりやすいことを意味しており、以後この質問紙で測定した概念を“同調行動傾向”と表記する。

②：①で回答した自身の行動を変えたいと思う程度について、「1：変えたいとは思わない」から「4：非常に変えたい」の4件法で訊ねた。高得点であるほど自身の行動を変えたい思いが強いことを意味しており、以後この質問紙で測定した概念を“変容願望”と表記する。

(3) 文化的自己観 高田・大本・清家⁽²⁴⁾が開発した“相互独立的－相互協調的自己観尺度”（7件法）を使用した。本尺度は、“相互独立的自己観”を表す“独断性”（6項目）と“個の認識・主張”（4項目），“相互協調的自己観”を表す“評価懸念”（4項目）と“他者への親和・順応”（6項目）の4因子（計20項目）から構成され、信頼性（ $\alpha=.70-.81$ ）および妥当性ともに検証されている。

(4) 大学適応感 大久保・青柳⁽²³⁾が開発した“大学生用適応感尺度”（5件法）を使用した。本尺度は、“居心地の

良さの感覚”（10項目），“被信頼感・受容感”（6項目），“課題・目的の存在”（7項目），“拒絶感のなさ”（6項目）の4因子（計29項目）から構成され、信頼性（ $\alpha = .76 - .90$ ）および妥当性ともに検証されている。

2. 3 調査材料の予備的検討

質問紙作成後、学部生10名を対象に予備調査を実施し、項目内容の妥当性や選択肢の表現、回答のしやすさなどについてのフィードバックを得た。その後、得られたフィードバックを基に全項目についての再検討を行い、必要と思われる項目表現の修正を加えた本調査用の質問紙を作成した。

2. 4 調査手続きと分析ツール

調査協力者に対して、本研究の目的や収集したデータは統計的に処理されるため個人情報保護されること、調査協力は自由意思でありいつでも回答を中断できることを書面と口頭により説明し、その説明の後、退室や調査協力への辞退の申し出がなかった対象に無記名式の質問紙調査を実施した。集合調査形式の調査においてはその場で質問紙を配布・回収し、個別配布個別回収形式の調査では配布後2週間以内に個人情報の保護に配慮した形で回収した。なお、以降の統計解析にはIBM SPSS Statistics version 21を用いた。

3 結果

3. 1 各尺度の因子構造の確認

同調行動尺度（同調行動傾向）の全19項目に著しい得点の偏りはみられなかったため、“仲間への同調”と“自己犠牲・追従”の2因子構造⁽¹³⁾に基づく主成分分析をそれぞれ行った。そのうち“自己犠牲・追従”において負荷量が著しく低かった「16. 友だちに嫌な思いをさせてまで、自分の意見を通したくない」については、項目内容が多義的であると判断し分析から除外した。残る18項目について再度主成分分析を行った結果、概ね満足できる負荷量と内的一貫性が得られ、両因子間の相関係数も葛西・松本⁽¹³⁾と近似な値（ $r = .39$, $p < .001$ ）を示した（表1）。

表1 同調行動尺度（同調行動傾向）の主成分分析結果

項目	負荷量
第Ⅰ因子 仲間への同調（ $\alpha = .80$ ）	
14. 私は、私の友だちがしていることと同じようなことをする	.69
13. できるだけ友だちと同じように行動したい	.69
11. 何かをするとき、みんなと一緒にだと安心する	.63
17. 一人でいると何となく不安で心細くなる	.62
18. 流行遅れにならないようにしたい	.62
10. 何かを決めるときには誰かに相談する	.62
12. 自分で決断することを避ける	.59
8. 友だちが流行のものを持っていると、自分も手に入れる	.59
9. 話題になっているTVや漫画・小説などは見たり読んだりする	.57
第Ⅱ因子 自己犠牲・追従（ $\alpha = .75$ ）	
15. 多くの場合、議論するより、相手に従う	.75
7. 自分の考えや意見を言うのを抑える	.72
4. みんなと意見が違うときは、自分の意見を取り下げる	.68
3. 周りの人と違ったことはしない	.65
5. 自分の意見を主張するより、相手の考えや意見を聞く	.62
1. みんなと同じように行動する	.61
2. あまり目立つようなことはしたくない	.57
6. いじめや嫌がらせの場面を目撃したとき、「いけないこと」とは思 いながらも傍観者になってしまうことがある	.46
19. 嫌だと思ってもその意見に従うことがある	.40
寄与率 第Ⅰ因子	38.93
第Ⅱ因子	37.89

なお、他の2尺度については、高田他⁽²⁴⁾と大久保・青柳⁽²³⁾の因子構造がともに再現されたため、先行研究にならい文化的自己観では“相互独立的自己観”（下位因子：“個の認識・主張”“独断性”）と“相互協調的自己観”（下位因子：“他者への親和・順応”“評価懸念”）の4因子（ $\alpha = .63 - .83$ ）、大学適応感では“居心地のよさの感覚”“被信頼感・受容感”“課題・目的の存在”“拒絶感のなさ”の4因子（ $\alpha = .78 - .89$ ）を抽出し、以降の分析に用いた。

3. 2 同調行動傾向と文化的自己観および大学適応感との関連

同調行動傾向と文化的自己観および大学適応感との関連を検討するために、各尺度間におけるPearsonの積率相関係数を算出した（表2）。その結果、同調行動傾向の2因子ともに相互独立的自己観との間で中等度の負の関連、相互協調的自己観と中等度の正の関連を示し、仮説1は支持された。なお同調行動傾向と大学適応感の関連についての相関係数値は、すべて.20未満であった。

表2 同調行動傾向と文化的自己観および大学適応感との関連

同調行動傾向	相互独立的自己観			相互協調的自己観			大学適応感				
	合計	個の認識	独断性	合計	親和・順応	評価懸念	合計	F1	F2	F3	F4
仲間への同調	-.45***	-.31***	-.46***	.54***	.43***	.50***	.05	.15*	.07	-.10	-.02
自己犠牲・追従	-.53***	-.55***	-.41***	.45***	.44***	.34***	-.05	.00	-.09	-.06	-.04

注) 大学適応感のF1-F4は、順に“居心地のよさの感覚”“被信頼感・受容感”“課題・目的の存在”“拒絶感のなさ”を表す。
* $p < .05$, *** $p < .001$

3. 3 異文化体験の有無と同調行動傾向および文化的自己観

仮説2を検証するため同調行動傾向と文化的自己観の各2因子について異文化体験の有無に関する t 検定を行ったところ、異文化体験が無い大学生（ $n=318$ ）の方が有る大学生（ $n=42$ ）に比べて同調行動傾向の2因子ともに得点が有意に高かった（表3）。文化的自己観では、異文化体験のある大学生が無い大学生よりも相互独立的自己観得点が有意に高く、逆に異文化体験の無い大学生がある大学生よりも相互協調的自己観得点が有意に高かったため、仮説2は支持された。

表3 異文化体験の有無による同調行動傾向と文化的自己観の得点比較結果

	経験無（ $n=318$ ）			経験有（ $n=42$ ）		t
	M	SD		M	SD	
同調行動傾向						
仲間への同調	2.58	.49	>	2.39	.42	2.42*
自己犠牲・追従	2.71	.43	>	2.57	.34	2.10*
文化的自己観						
相互独立的自己観	4.10	.81	<	4.47	.82	2.77**
相互協調的自己観	5.13	.70	>	4.86	.55	2.33*

注) t 検定時の自由度は、全て358であった。

* $p < .05$, ** $p < .01$

3. 4 同調行動傾向に対する捉えの類型化

同調行動傾向を表す“仲間への同調”と“自己犠牲・追従”は、前者が内面的同調を、後者が表面的同調をそれぞれ表している⁽¹³⁾と考えられるが、本研究では両因子の尺度得点だけでなくその行動に対する変容願望の尺度得点の高低の組み合わせによって対象の群分けを行った。具体的には、同調行動尺度で得た2因子について同調行動傾向が平均値以上の対象をそれぞれ抽出した後、各因子の変容願望得点の平均値を基準点とする高低2群に分けた。以上の手続きを経て、両因子で抽出した各2群について、同調行動傾向は高いがその行動への変容願望は低い“同調行動現状維持群”と、自身の同調行動を変えたいという願望が強く同調行動を消極的にとっていると考えられる“同調行動消極群”と命名した（表4）。

3. 5 同調行動傾向に関する各類型の文化的自己観と大学適応感の特徴

仮説3を検証するために、文化的自己観（2因子）および大学適応感（4因子）について同調行動に関する類型の t 検定を行い、その結果の概要を表4に示した。 t 検定の結果、“仲間への同調”と“自己犠牲・追従”のそれぞれで

文化的自己観の2因子と大学適応感の“拒絶感のなさ”の得点差が有意であった。さらに、内面的同調傾向を表す“仲間への同調”では大学適応感の“被信頼感・受容感”，表面的同調傾向を表す“自己犠牲・追従”では大学適応感の“課題・目的の存在”の得点差に有意あるいは有意傾向が示され，ともに“同調行動現状維持群”の方が“同調行動消極群”よりも高かった。以上のことから，同調行動傾向だけでなく自らがとっている同調行動への変容願望が大学適応感を左右するという仮説3は部分的に支持された。

表 4 自身の同調行動傾向に対する捉えの類型化と各群の特徴

因子名	類型化における得点区分		各群の人数と <i>t</i> 検定の結果	
	同調行動傾向	変容願望	同調行動現状維持群	同調行動消極群
仲間への同調	2.57以上	基準点：1.70 →	119名	86名
文化的自己観				
相互独立的自己観：現状維持群>消極群 ($t(203)=3.35, p<.01$)				
相互協調的自己観：現状維持群<消極群 ($t(203)=3.05, p<.01$)				
大学適応感				
居心地のよさの感覚： ($t(203)=.43, ns.$)				
被信頼感・受容感：現状維持群>消極群 ($t(203)=1.78, p<.10$)				
課題・目的の存在： ($t(203)=1.37, ns.$)				
拒絶感のなさ：現状維持群>消極群 ($t(203)=2.87, p<.01$)				
自己犠牲・追従	2.70以上	基準点：2.07 →	85名	95名
文化的自己観				
相互独立的自己観：現状維持群>消極群 ($t(178)=2.95, p<.01$)				
相互協調的自己観：現状維持群<消極群 ($t(178)=4.78, p<.01$)				
大学適応感				
居心地のよさの感覚： ($t(178)=.59, ns.$)				
被信頼感・受容感： ($t(178)=.80, ns.$)				
課題・目的の存在：現状維持群>消極群 ($t(178)=2.24, p<.05$)				
拒絶感のなさ：現状維持群>消極群 ($t(178)=1.98, p<.05$)				

注) *t* 検定の結果の記載に際して，抽出した2つの群を“現状維持群”“消極群”とそれぞれ略記した。

4 考察

本研究では，友人関係における同調行動傾向とその行動に対する変容願望を測定し，文化的自己観と大学適応感との関連を検討した。同調行動傾向と文化的自己観の関連については仮説1が支持されるとともに，変容願望を含めた検討から同調行動傾向が高い場合でもその行動に対する変容願望が低く，納得して同調行動をとっている“同調行動現状維持群”では相互独立的自己観が，変容願望が高い“同調行動消極群”では相互協調的自己観がそれぞれ高いことが示された。また両群で大学適応感にも有意差がみられ，“同調行動消極群”に比べて“同調行動現状維持群”の大学適応感の方が高い傾向にあった。

日本人の自己の生涯発達過程においては，相互協調的自己観だけでなく相互独立的自己観も取り入れていくことが精神的健康や良好な適応を維持する上で必要であること⁽²¹⁾が指摘されているが，“同調行動現状維持群”は集団内や対人関係において自分の意思や感情体験を表出するため，内的な適応状態も良好であると考えられる。また仮説2の検証においては，異文化体験を有する学生が42名と分析に際してサンプルの偏りが生じるという課題はあったものの，異文化体験によって相互独立的自己観の発達が促進され，同調行動傾向も減少する可能性が示唆された。この背景には，異文化交流の過程で互いの文化や個性の違いを尊重したり，自分の考えや感情体験を明確化し母国語以外の言語で相手に伝えるといった経験の影響が考えられる。近年，日本の大学生は留学を控える傾向⁽²⁵⁾にあるが，大学内外で留学生や異文化で育った人と交流する機会は増えており，異文化交流を取り入れた教育実践やプログラムも幼児期から青年期にかけて盛んに行われている⁽²⁶⁻²⁸⁾。そのため，このような異文化交流を取り入れた教育実践を展開したり，表面的同調の低減につながる支援を行う上で有益な知見を得るためにも，今後は異文化体験に伴うどのような要因が同調行動傾向に影響を与えているのかについてサンプルの偏りを是正した上で，質的研究も含めた更なる検

証を行っていくことが必要と考える。

大学適応感における“同調行動現状維持群”と“同調行動消極群”の差異の検討では、自身の同調行動について「内心では変えたい」「できれば他の人に合わせた行動をとらずにいたい」と考えている“同調行動消極群”の方が、大学生活において相手からの嫌悪感や拒絶への不安あるいは疎外感を強く体験していることが明らかになった。この結果は、“同調行動消極群”が不本意ながら同調行動をとっているために、友人とオープンで信頼感のある関係を構築しにくく疎外感を抱きやすい状態にあることや、それによって“同調行動現状維持群”よりも不適応状態に陥りやすく“過剰適応”に近い状態の大学生も含まれている可能性を示唆していると考えられる。さらに、大学適応感の“被信頼感・受容感”と“課題・目的的存在”でも両群で有意傾向あるいは有意な得点差がみられており、先述のように“同調行動現状維持群”の方が周囲との信頼関係を築きながら、目的意識を持った大学生活を送りやすいと考えられる。以上の結果は、同調行動傾向に加えてその行動への変容願望を測定したことで明らかになったものであり、今後の同調行動研究でもより詳細な検討を行うためには変容願望も考慮することが望ましいと思われる。

最後に、本研究の課題として3点を述べる。1点目の課題として、本研究の調査対象が単科大学の大学生であったため、学生の同質性が高く同調行動の測定に影響を与えた可能性が挙げられる。単科大学に所属する学生であれば、それぞれの目標や行動、考えといった特徴の類似性が高いことが推測されるため、本研究の結果を日本の大学生全般の傾向として一般化することには慎重でなければならない。したがって、今後大学生を含む青年期一般の同調行動に関する研究を進める際には、大学の規模や学部、調査対象の属性など個人内外の要因について考慮する必要がある。2点目は、同調行動傾向に関する類型化が挙げられる。本研究では、葛西・松本⁽¹³⁾が開発した同調行動尺度を参考に大学生向けの同調行動尺度を作成し、自らの行動に対する変容願望も併せて測定した。その結果、各因子の内的一貫性は統計解析を行う上で十分な値が得られるとともに、大学生により適した項目内容になったと考えられる。しかし、妥当性の検証が不十分であることに加え、同調行動傾向が平均値以下であった半数以上の対象を変容願望の得点を用いて高低群に区分する際に両群の人数比に偏りが生じた点は課題と考えられる。したがって、今後尺度の妥当性を検証する過程において変容願望も同時測定する場合には、選択肢を広げたりその表現内容を修正するといった対応が必要と思われる。3点目の課題として、本研究で測定した同調行動傾向や変容願望が調査対象の意識レベルに基づくものであるため、“過剰適応”と同様に無意識レベルでは違和感や疎外感を抱きながらも変えたいとは思わず、無自覚的に他者に合わせる同調行動をとっている状態とそうでない状態とを識別していない点が挙げられる。したがって、今後は質問紙法だけでなく投影法的手法を用いたアプローチや松本・葛西⁽¹⁴⁾で用いられているインタビュー調査などを併用することで、同調行動とその関連要因についてのより詳細な理解が進むものと考えられる。

相互協調的自己観が優勢とされる日本では、同調行動が適応的に機能する状況や場面は多いと考えられるが、個別性の尊重やアイデンティティの確立においては、自らの意思に基づく内面的同調が必要になると思われる。葛西・松本⁽¹³⁾は、友人関係において表面的同調が過度で内的な不適応感を抱いている青年への臨床心理学的援助の1つとしてアサーション・トレーニングの有効性を指摘しており、本研究においても内面的同調との関連が深いと思われる“同調行動現状維持群”で個性や自己表現が尊重される相互独立的自己観が高いという結果を得た。藤原⁽¹⁾や葛西・松本⁽¹³⁾が論じた同調行動の2区分は、友人や恋人、家族などさまざまな対人関係を円滑に営んだり、精神的健康を維持しながら充実した大学生活を送るための臨床心理学的援助を行う上で重要な示唆に富む概念であり、今後も更なる研究の蓄積が期待される。

引用文献

- (1) 藤原正光 (2006). 同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み (1) ——大学生による小5時代の回想から—— 文教大学教育学部紀要, 40, 1-9.
- (2) Asch, S. E. (1956). Studies of independence and conformity: I. A minority of one against a unanimous majority. *Psychological Monographs*, 70, 1-70.
- (3) Frager, R. (1970). Conformity and anticonformity in Japan. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 203-210.
- (4) Jackson, J. M., & Saltzstein, H. D. (1958). The effect of person group relationships on conformity process. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 57, 17-24.
- (5) 木下稔子 (1964). 集団の凝集性と課題の重要性の同調行動に及ぼす効果 心理学研究, 35, 181-193.
- (6) 田崎敏昭 (1971). 与えられた標準への同調・非同調と課題想起に関する実験的研究 教育・社会心理学研究, 10, 73-78.
- (7) 戸川行男 (1956). 適応と欲求 金子書房

- (8) 坂本 剛 (1999). 中学生の学級集団における同調行動と適応についての一研究 名古屋大学教育学部紀要, 46, 205-216.
- (9) 浅井継悟 (2012). 日本における過剰適応研究の動向 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60, 283-294.
- (10) 大嶽典子 (2006). 過剰適応における内的満足感と外的評価および関連要因の検討 上越教育大学大学院修士論文 (未公刊)
- (11) 須藤春佳 (2003). 前青年期の「chumship体験」に関する研究——自己感覚との関連を中心に—— 心理臨床学研究, 20, 546-556.
- (12) 田中良仁・吉井健治 (2005). チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響 心理臨床学研究, 23, 98-107.
- (13) 葛西真記子・松本麻里 (2010). 青年期の友人関係における同調行動——同調行動尺度の作成—— 鳴門教育大学研究紀要, 25, 189-203.
- (14) 松本麻里・葛西真記子 (2009). 青年期の友人関係における同調行動に関する研究 鳴門生徒指導研究, 19, 81-93.
- (15) 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 24, 180-190.
- (16) 保坂 亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究, 4, 15-26.
- (17) 岡田 努 (2010). 青年期の友人関係と自己——現代青年の友人認知と自己の発達—— 世界思想社
- (18) 岡田 努 (2012). 現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成——傷つけ合うことを回避する傾向を中心として—— 金沢大学人間科学系研究紀要, 4, 19-34.
- (19) Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- (20) 高田利武 (2004). 「日本人らしさ」の発達社会心理学——自己・社会的比較・文化—— ナカニシヤ出版
- (21) 高田利武 (2012). 日本文化での人格形成——相互独立性・相互協調性の発達の検討—— ナカニシヤ出版
- (22) 大久保智生 (2010). 青年の学校適応に関する研究——関係論的アプローチによる検討—— ナカニシヤ出版
- (23) 大久保智生・青柳 肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み——個人—環境の適合性の視点から—— パーソナリティ研究, 12, 38-39.
- (24) 高田利武・大本美千恵・清家美紀 (1996). 相互独立的一相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成 奈良教育大学紀要, 24, 149-156.
- (25) 文部科学省 (2012). 日本人の海外留学状況 (平成24年1月集計)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/01/_icsFiles/afieldfile/2012/02/02/1315686_01.pdf (2013年9月10日取得)
- (26) 帆刈 猛・安東裕躬・小高千恵 (2008). 幼児期における異文化交流の試みと、その幼児に対する影響 関東学院大学人間環境学会紀要, 9, 67-82.
- (27) 稲葉みどり (2012). 愛知教育大学におけるグローバル人材の育成の取り組み——タイからの招聘研究者を人的資源として—— 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 2, 19-27.
- (28) 稲葉みどり (2013). インドネシアからの招聘研究者との連携による異文化理解の授業実践——グローバル人材の育成に向けて—— 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 3, 53-61.

Relationships of college students' conformity behavior with cultural views of self and subjective university adjustment

Toko IGARASHI* • Tamaki NOMURA** • Masakazu IWASAKI***

ABSTRACT

This study examined the relationships among the two forms of conformity (internal conformity and external conformity), the cultural views of self and the subjective university adjustment. Data were collected from 360 college students (151 men and 209 women) with three questionnaires. The results indicated that the conformity behavior tendency is negatively related to an independent self-construal and positively related to an interdependent self-construal. In addition, participants who had a desire to change their own conformity behavior tended to feel more rejected or alienated in their campus life compared to participants who didn't have a desire to change them. Suggestions for further studies were included, especially the importance of understanding intrapersonal as well as interpersonal factors with socio-cultural aspects.

* Clinical Psychology, Health Care and Special Support Education ** Meigakukan

*** The Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education (Ph.D. Program)